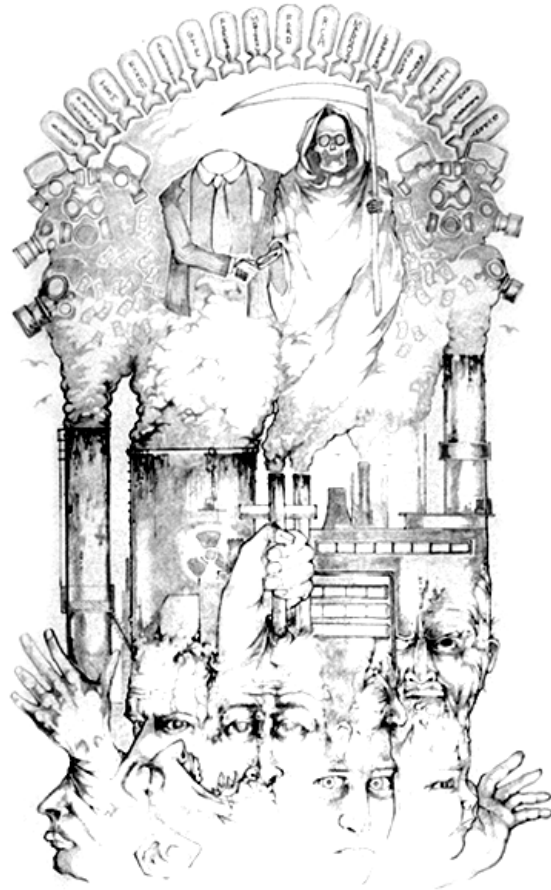
原始主義入門　　ジョン・モア著

著者注：本書はアナコプリミティズム（無政府原始主義）の最終的な声明文というよりは、一般的な用語を用いた個人的な説明の試みである。説明が限定的、排除的にならないよう、総合的な本題の説明を試みた。しかし、詳細でなかったり、謝った解釈があったり、たまに（避けがたいことだが）一般化しすぎたりした部分があれば、お詫びをしておきたい。

アナコプリミティビズムとは何か？

アナコプリミティビズムとは（ラディカルな原始主義、反権威主義的原始主義、反文明運動、又は、単に原始主義といってもいい）文明全体をアナキスト的な視点から批判し、人々の生活を包括的に変革し始めようとする急進派の流れを短くまとめた用語である。厳密に言えば、アナコプリミティビズム、あるいは無政府原始主義というものが存在するわけではない。この思想運動の流れで主要な声明者であるフレディ・パールマンは、かつて語った。「呼ばれて振り向く唯一の主義といえば、『細胞主義』のみだ。」この流れに携わる人々は、ある思想の信奉者になろうと望んでいるわけではなく、単に、人と人、又、人と生物圏とが調和を保ちながら、自由な共同体の中で、自由な個人として生きることを望んでいる人々なのである。そのため『アナコプリミティビスト』という用語、又はその他の思想上のレッテルによって制限されることを拒む。つまり、アナコプリミティビズムという語は、よくして、あるプロジェクトを共する様々な個人を特徴的に表す便利なラベルにすぎない。そのプロジェクトとは、全権力関係の廃止、例えば統制、圧制、支配、搾取が行われる社会構造の撤廃であり、そのような力関係を全て排除した共同体を創造することである。

では、なぜこのような傾向の特徴を表すために、アナコプリミティビズムという用語が使われるのか？1986年、デトロイト、フィフス・エステート紙（注１）に関与するサークルが、原始主義声明を出した。彼らは、土着民の世界や原始的でオリジナルな共同体の特徴の再評価と合わせて、「西洋文明という科学技術に頼った構造の批判的な分析」を行うことに携わっていると表明した。フィフス・エステートグループは、文明は支配のために計画されたもの、といいう見方の文明批判を、原始的なものを再評価することで補おうとした。彼らは、原始を再生の源、反権威主義なインスピレーションの源であると見なす。この原始の再評価はアナキスト的見地、つまり権力関係の撤廃に重点を置く見地より発している。フィフス・エステートグループは「最近よく行われるポストモダンなアナキズムと、原始的で（本来的という意味での）大地基本の幻想的な未来像、の統合」を指摘し、以下のように述べた。我々はアナキストそのものではないが、アナキー（無政府）を支持する。つまり、権力に相反し、全イデオロギーを排除する、生きた体験として欠かせないアナ

キズムである。フィフス・エステートという企画での我々の仕事は、この運動に関与する際の様々な可能性を探ることだけでなく、アナキーの原始的ルーツを再発見し、その現在の様子を書面化することである。同時に、新たな議論の場を提示するために、我々の時代で権力がどのように発展したかを検証し、現代の全体主義的ディスコース（科学技術の仮装で、人間的意味を破壊し、人々と自然の連体性を崩していくあの超現実）による横暴を根底から徐々に打ち崩すために、批判を加えるのである。自由のための全闘争の下にあるのは、この中心的必要性である。つまり、自律しつつ間主観的な相互性に基づき、自然界と密接に連結した真に人間的なディスコースを取り戻すことである。狙いは、原始的アナキーと現代的アナキーとの統合を行うこと。つまり、反国家統制主義的、反権威主義的で環境保護に焦点を置いた原始の生活方式と、権力関係についての最新のアナキスト的分析とを統合することである。目的は、原始を再現したり、原始に戻ったりすることではなく、原始をインスピレーションの源、様々な無政府の形体を例証するものとして見ることである。アナコプリミティビストにとって、文明とは、様々な力関係が発展していく包括的な文脈である。原始社会においても基本的な力関係はいくらか存在する（だからこそアナコプリミティビストは原始社会の複製を試みないのだが…）。文明において初めて、我々の生活や人間と自然界との関係のほぼ全面で、権力関係が蔓延するようになる。文明は、またの名をメガマシーン、リバイアサンというが、それ自身の原動力を得て動き、やがてその支配者であるはずの者でもコントロールすることが出来ないまでの、巨大な機械となる。内面化された服従のパターンにより規定され、処理される日常生活の業務にうち動かされ、人々は文明と云う機械、又、文明組織自体の奴隷となるのである。この組織とその様々な支配形態を広域に渡り拒絶し、権力自体に背くことのみにより、文明を廃止し、それに変わるラディカルな方策を提唱することが可能になる。マルキシズムや古典的アナキズム、フェミニズムなどのイデオロギーは文明のいくつかの側面に異議を唱えるが、アナコプリミティビズムは、文明自体、様々な圧政が力を増し、広く浸透し、実際に可能になってしまう文明という文脈自体に、異議を唱えるのである。アナコプリミティビズムは、様々な相反する流れからのいろいろな要素– 環境保護意識、アナキスト的反権威主義、フェミニスト的批判、シチュエーショニスト（注 2）の概念、無労働の論理、テクノロジーの批判など–を包括しているが、個々の権力の形に抵抗するにとどまらず、それら全てを否定し、それに代わるラディカルな方策を提唱するのである。

注1 Situationist International は1986年の反乱時に需要な役目を果たしたフランスの過激派政治グループ。政治的ドグマの限界を認識し、グローバル化した消費社会の繁栄を予知。

注2 'Fifth Estate' は米デトロイトにベースを置く反権威主義の雑誌。80年代90年代における反文明主義批評に大きく貢献した。

アナコプリミティビズムは、アナキズムやその他の急進的イデオロギーとどう異なるか？

アナコプリミティビズムの見地から見れば、他全ての急進的主義・思想は、革命的と唱っていようがいまいが改良主義のように思われる。例えば、マルキシズムや古典的アナキズムは、文明を引き継いだ上で、その構造をある程度組み換え、その最低の悪習や迫害を取り除くことを目的としている。それでも、文明生活の未来における筋書きは 99 パーセント変わらないままだ。それは、それらの思想が問題視する文明の側面が小さいだからである。両者とも資本主義の廃止を望み、古典的アナキズムでは政府も廃止しようとしているが、全体的な生活様式はあまり変わらないだろう。産業界での労働者

による統制や、国会に代わる集落議会や、環境への配慮など、社会経済関係においていくらかの変化はあっても、基本的なパターンは変わらないままだ。進歩という西洋的模範例は単に修正されるだけで、なお一つの理想的典型として留まっている。大衆社会は本質的にそのまま継続するであろう。大抵の人々が働き、人工的でハイテク化された環境に生き、様々な圧制と支配を被る。急進的な左派思想は権力の廃止ではなく、権力を自分達のものにすることを目的とする。よって、彼らは改宗者を勝ち取り、支配権獲得に向けた政策を練るために様々な排他的グループ（幹部構造、政党、意識向上のためのグループなど）を形成する。アナコプリミティビストにとって、組織とは単に烏合の衆であり、特定の概念を権力の座におさめるための一味にすぎない。政治、つまり「統治の学術」は、プリミティビストのプロジェクトには属さない。欲望、喜び、相互助け合い、又、ラディカルな自由のための方策だけがそのプロジェクトを形成する。

アナコプリミティビズムによると、権力はどこから生み出されるか？

またもアナコプリミティビストの間でよく議論になる問題。パールマンは非個人的団体、又は、抽象的権力関係が生まれる時を、原始的無秩序が文明化された社会関係により取り壊される決定的瞬間とみなす。ジョン・ザーザンは、対照的に、象徴的な仲介物の発展が、数字、言語、時間、技術、後には農業という形をとって、人間の自由から飼いならされた状態への移行手段になっていると見なす。アナコプリミティビズムにおいてはその起原に焦点を当てることが重要である。というのも、原始主義は、個人、社会的関係、人と自然界との相互関係を構造化する権力の様々な形を、指数関数的に暴露、疑問視、挑戦、廃止することを目的とするからである。権力の根源を突き止めることは、文明の残骸の中から安全に救いだすことのできるものは何か、又、文明破滅後、権力関係の再発を防ぐには何を根絶するべきか、を見極める一つの手である。

アナコプリミティビストによってどんな未来が描かれるだろうか？アナコプリミティビストの定期刊行物『Anarchy; A Journal of Desire Armed』によると、未来は「今までになく相互協力的で、共同体意識が強く、環境に気を使い、フェミニストで自発的で野性的」とある。これは、その描写として得られる限界だろう！その思い描かれる未来象は、陳腐な意味での「原始的」では決してないということを強調しなければならないが、今のところ、何の青写真も規制事項もない。フィフス・エステートグループは 1979 年に次のように述べた。「我々のことを『洞窟に戻りたい』んだとか、格好だけだとか言って、つまり文明の安楽さを満喫しつつ文明を酷評していると批判する者が出てくることはあらかじめ想定しておこう。我々は、石器時代をユートピアのモデルとして提唱しているわけでも、収穫と狩猟を生業とした生活に戻ろうと言っているわけでもない。」

このような良くある誤解を解くために、アナコプリミティビズムが描く将来は独特で、過去に範例が無いということを強調することが大切だ。もちろん、原始的文化の中に未来の予告を見ることができ、将来像はそこから種々の要素を取り入れたものになるだろうが、アナコプリミティビストの世界は、過去のどんな形態のアナキーともかなり違ったものになるだろう。

アナコプリミティビズムでは科学技術をどのように見るか？

ジョン・ザーザンの定義によると、科学技術とは「労働／生産／産業の分化によって奏でられる合奏であり、私達と自然にその音が及ぼす影響である。テクノロジーとは、我々人間と自然界の間に割って入るものの総体、又、我々同士の間に入り、お互いから遠ざけるものの総体である。それは、我々の苦悩の元である超疎外の舞台を作り出し、再生産するために必要となるあの単調でつまらない骨折り仕事と害毒。階層組織と支配構造のどの発展過程であっても感じられる支配の感触と形である。」それゆえ、反テクノロジーの姿勢はアナコプリミティビズムの実践において重要な役割を果たす。しかし、フレディ・パールマンが語るには「テクノロジーとは、単なるリバイアサンの武器、そのかぎつめであり牙である。」それゆえ、アナコプリミティビストはテクノロジーに反対であるが、文明における支配力にとってテクノロジーがどれほど中心的であるかについては議論の余地がある。

まず、テクノロジーと道具（器具）との区別をつけなければならない。パールマンによれば、原始時代の人々は、様々な道具や器具を発展させても科学技術を発展させないことが示されている。「杖やカヌー、穴を掘るための棒、壁などは個人で作れる物か、壁のように一度に多くの人の協力を必要とする物であった。ほとんどの道具は古代からあり、（物質的）超過量（それらの道具が可能にするとされる）は初期から豊富だった。しかし、それらが非個人的制度を生み出すことはなかった。道具と非個人的制度の両方を生み出すものは、生物、人間である。」道具は、その地域で作られる、小規模で、特定の機会に限った個人か小さなグループによる産物である。よって、支配と強制のシステムを産み出すことはない。

一方、科学技術は、原料抽出、生産、分配、消費から成る相互に連結した大規模なシステムの産物である。そのようなシステムは、それ自身に勢いがつき独自の動力を得る。そのため、大規模な支配と服従の構造（これがパールマンの言う非個人的制度）を要求する。フィフス・エステートグループが 1981 年に指摘したように「科学技術とは、私たちが好きなように使える単純な道具では無い。それは一つの形の社会組織であり、一連の社会関係である。それは独自の法則を持つ。科学技術の使用に加担するには、その権威を受け入れなくてはならない。現代の科学技術組織を構成する業務の莫大な規模、複雑な連動関係や、階層化が、権威主義的指揮を必要とし、独立した個人による決断を不可能とするのである。」

アナコプリミティビズムは反組織的な思想運動の流れである。あらゆる組織、団体機関、抽象的概念、人工物、化学合成物、機械には、権力関係を表象するという理由から反対する。このように、アナコプリミティビズムは科学技術や科学技術組織に反対であるが、ここに示したような意味での道具や器具の使用には反対ではない。アナコプリミティビズムの世界で、何らかの形で科学技術の使用が適切であるかどうかとなると、これはまた議論の余地のあるところだ。1979 年にフィフス・エステートグループは以下のように述べた。「未来の社会について賢く論じるには、社会的に我々が望むものを前提にし、最も基本的な要素に還元し、そこからどんな科学技術の使用が可能かということを決定すべきである。セントラルヒーティングや、水洗便所、電気の明かりは、誰もが欲しいだろうが、人間性を犠牲にしてまでは望まない。ともすると、全て問題なく可能かもしれないし、そうでないかもしれない。」

では、薬はどうだろうか?

究極的に言うと、アナコプリミティビズムとはもっぱら癒しについての事だ。個人の内部、人と人との間、そして人と自然との間にできてしまった裂け目、文明化、又、政府や資本、科学技術などを含めた権力を通してできてしまった裂け目を癒すことなのである。ドイツの哲学者ニーチェが、痛みと痛みの対処法こそがどんな自由社会でもその中心にあるべきだ、と言っているが、この点でニーチェは正しいのである。個人や共同体、大地自体が文明の特色である権力関係によって、程度の差こそあれ、(全て何らかの形で)損なわれている。人々は心理的にダメージを受けているだけでなく、病気や疾病に襲われている。アナコプリミティビズムによって痛みや病気を無くすことができると言っているわけではない!しかし、調査によれば、多くの病弊が生活状況の文明化された結果であることが判明しており、そのような状況が無くなれば、ある種の痛みや病気、疾病は消滅するだろう。

その他に関しては、痛みを中心においた世界ならば、病気や疾病の治療法を探すことによって、痛み緩和の追求に精力的であろう。アナコプリミティビズムはこの意味で医術にとても感心がある。しかし、西洋で実践されているあの人を疎んじるハイテクによる、製薬中心の医術だけが医術の可能な形ではない。アナコプリミティビズムの未来において、何をもって医術とするか、という問題は、上記のフィフス・エステートグループによる科学技術についてのコメントにあるように、環境保護中心の共同体の中で、個人が自由に生きられる暮らしを犠牲にすることなく、何が可能か、人々が何を望むかにかかってくる。

人口問題はどうなのか?

アナコプリミティビストの間に、この議題に関しては特に意見の一致が無いので、論争の的となる問題である。人口削減は必要ないという声もあれば、環境保護のためや、アナコプリミティビストが思い描くような生活形態を維持するためには必要である、という声もある。ジョージ・ブラッドフォードは、『どこまでいけば、徹底した環境保護か?』中で、女性の産児制限は人口率の低下につながると論じている。著者の個人的な見解によれば、人口は削減すべきだが、これは自然減によっておこるだろう。つまり、人々が死ぬと、その全人口が置き換えられる訳ではないので、全体の人口率は減少し、最終的には安定するだろうと考えられる。アナキスト達は以前から、自由な世界では、過剰な子作りへの社会的、経済的、心理的圧迫が取り除かれていくと主張してきた。他にもっと面白いことが起こって人々の時間をふさぐだろう!フェミニスト達は、性差別による拘束や家族構成から解放されれば、女性が家父長的社会にあるよように、生殖機能によって限定されることが無くなり、ひいては、これが人口率の低下に繋がるだろう、と述べている。という訳で、人口は否応無しに減少するだろう。

結局、パールマンが簡明に示すように、「人口増加とは真に文明の産物であって、人間数の安定した増加はリバイアサンそのもに劣らず、しつこい。この現象は、リバイアサン化された人間たちの間のみに存在するようである。動物だけでなく自然状態にある人間の共同体もまた、他の全てをその土地から追い出してしまう程までに自種を繁殖させはしない。」だから、リバイアサン的社会関係が廃絶され、共同的調和が回復されれば、人口が安定しないわけは無いのだ。アナコプリミティビズムに敵対的な一部の解説者達が言い広めている妙な幻想—アナコプリミティビストが思い描くよ

うな人口レベルを達成するには、突然の大量死か、又は、ナチ的大虐殺しかない– などは無視してかまわない。そんなのは単に中傷戦術にすぎない。アナコプリミティビストたちが、行政的、軍事的装備を備えた国家はもとより、あらゆる党や組織を含む全ての権力関係の廃止に身を投じている限り、そのような組織的大虐殺は、まったく恐ろしいことであるばかりか、決して起こり得ないことである。

アナコプリミティビズムの未来はどのようにしたら訪れるか？

64000 ドルの質問！（まったく怪しいメタファーを使うが…）ここには不動のルールも青写真もない。上手い答えは、逃げ口上だと思われるかもしれないが、様々な闘争の形態は反乱の過程で生まれる。これは真実だが、必ずしも、あまり助けにはならない！確かなことは、アナコプリミティビストは権力を追求する思想ではない、ということ。国家権力を占領し、工場を乗っ取り、改宗者を獲得し、政治団体を作り、人々を顎で使う、などということは目指していない。そうではなく、アナコプリミティビズムでは、人々が、相互に、又、周囲の生物圏と依存・補助し合う自由な共同体の中で暮らす自由な個人、となることを望む。

それゆえ、望ましいのは、全面的変化であり、自己像、生活の仕方、生き方、意志伝達の仕方の変化である。つまり、これまでに試行錯誤されてきた権力志向のイデオロギ—は、アナコプリミティビズムのプロジェクトにまったく関係無いのだ。アナコプリミティビズムはあらゆる形の権力を廃止しようとする。それゆえ、アナコプリミティビズムのプロジェクトに相応しく釣り合った、新たなやり方や在り方が開発される必要がある。これは、常に進行中のプロセスで簡単に答えることはできない。

何がなされるべきか？現在のところ、多くの人が同意する答えは、抵抗の共同体作りがアナコプリミティビズムのプロジェクトの中で重要な要素であるということ。共同体という語は、最近やたらに様々なおかしな意味で使われているが（例えば、ビジネス共同体）、それは真の共同体が資本と国家によって破壊されてきているからである。しばしば権力に対抗する力の源であった伝統的な共同体が破壊されたとすれば、抵抗の共同体—抵抗を共通の目的とする個人の集まりで構成される共同体—を新たに作ることが、行動のための基地を再成する手であろう、と考える者もある。

古いアナキストの考え方に、新たな世界は、古い世界の殻の中でつくり出されなくてはならない、というものがある。これの意味するところは、文明自身の意図で、又は我々の努力で、又はその二つが融合することで文明が崩壊した時、それに取って変わる物が既にそこに待機していなくてはならない、ということである。これは実に本当である。というのも、良い代用が無ければ、崩壊によって起こる社会混乱が、ファシズムやその他の全体主義の独制が栄える心理でも郊外でも、来る未来の（可能な限りの）縮図となるような抵抗の共同体を作り出す必要がある。それは、行動（特に直接行動）の基地となるだけでなく、新しい考え方、振舞い方、意思伝達の仕方、在り方、要するに、新たな解放的文化全体を創造する場として機能する必要がある。それらの共同体では、人々が真の欲望と喜びを発見し、模範的行動という古き良きアナキストの考えにあるように、他の人々に別の生き方が可能だという例を示す場所となる必要がある。

しかしながら、他にも探究の必要がある可能性はたくさんある。アナコプリミティビストによって思い描かれる世界は、予想される自由のタイプや程度から言って、人間の経験に先例を見ないものだ。だから、そこから発展しえる抵抗と反乱の形には限りがない。思い描かれるような莫大な変化を遂げるには、あらゆる種類の革新的な考え方と行動が必要である。

もっと無政府原始主義について知るには…

反文明主義／無政府原始主義の情報源

推薦書

私達が文明の解釈・その崩壊の必要性を理解する上で影響の大きかった本の一部をリストにした。

***E**lements of Refusal, Against Civilization, Future Primitive*, *Running on Emptiness*

著 **John Zerzan**

***A**gainst History Against Leviathan*, *Anything Can Happen* 著 **Fredy Perlman**

***F**eral Revolution* 著 **Feral Faun**

***A** Language Older Than Words* , *The Culture of Make-Believe* 著 **Derrick Jensen**

***M**y Name Is Chellis and I am In Recovery From Western Civilization*, *Off the Map*

著 **Chellis Glendening**

***W**oman and Nature: The Roaring Inside Her*

著 **Susan Griffin**

***G**reen History Of The World: The Environment and the Collapse of Great Civilizations*

著 **Clive Ponting**

***T**he Only World We've Got*, *Coming Home to the Pleistocene* 著 **Paul Shepard**

***A**gainst the Mega-Machine* 著 **David Watson**

***D**irect Action: Memoirs of an Urban Guerrilla*

著 **Ann Hansen**

***I**n the Absence of the Sacred* 著 **Jerry Mander**

***T**he Technological Society* 著 **Jacques Ellul**

***F**ire and Ice*

共著 **Skunkly Monkly** , **Laurel Luddite**

***T**he Myth of the Machine, volumes 1 & 2*

著 **Lewis Mumford**

***V**oices of the First Day: Awakening in the Aboriginal Dreamtime* 著 **Robert Lawlor**

***J**ourney to the Ancestral Self: The Native Lifeway Guide to Living in Harmony with Earth Mother*

著 **Tamarack Song**

***T**he Revolution of Everyday Life*

著 **Raoul Vaneigem**

***A**narchy and Ecstasy* 著 **John Moore**

注: 多くはアメリカ **Black and Green Distro**, P.O. Box 835, Greensburg, PA 15601, USA や、イギリス **Re-Pressed Distro** (住所は以下参照)より取り寄せ可。

連絡先

Green Anarchy / Feral Visions

P.O. Box 11331, Eugene, OR 94440, USA

collective@greenanarchy.org

feralvisions@greenanarchy.org

Wildroots / Feral Forager

P.O. Box 1504, Asheville, NC 28802, USA

Green Anarchist

BCM 1715, London, WC1N 3XX, UK, USA

Re-Pressed Distro

c/o The Cardigan Centre

145-149 Cardigan Rd, Leeds, 1LJ, UK

www.re-pressed.org.uk

Do Or Die (Prior House)

POB 2971, Brighton, East Sussex,

BN2 2TT, UK

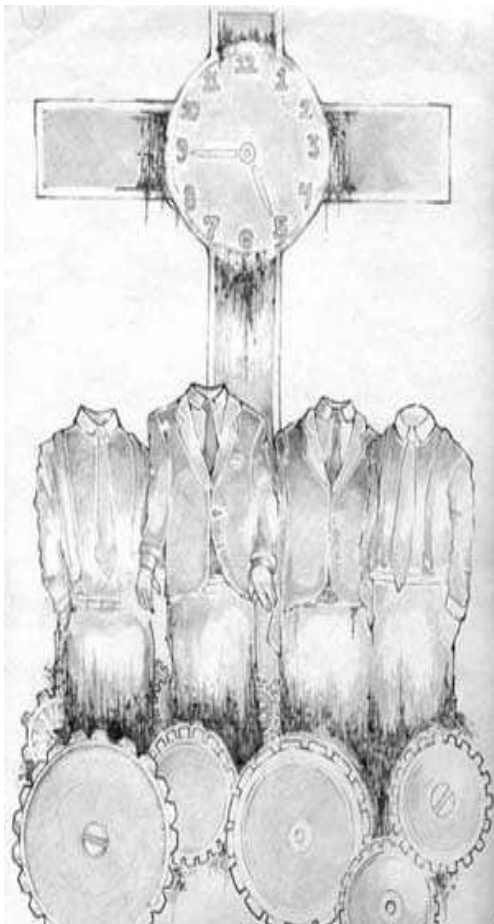
Terra Selvaggia (Il Silvestre)

via del Coure no. 1, 56100 Pisa, Italy

EarthFirst! UK

www.earthfirst.org.uk

www.eco-action.org

注: EarthFirst!は厳密に言うと反文明主義ではないけれど、その中には無政府原始主義／反文明主義だと自称する人が多い。

ホームページ

www.primitivism.org

www.greenanarchy.org

www.blackandgreen.org

www.wildroots.org

www.geocities.com/aliveandawol

www.greenanarchist.org

www.radicalanthropology.com

www.insurgentdesire.org.uk

www.gowildordietryin.org

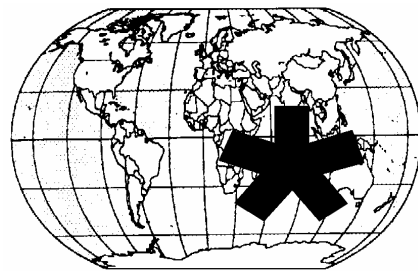
www.earthskills.org

www.teachingdrum.org

www.primalwar.org

www.spiritoffreedom.org.uk

www.ecoprisoners.org

この情報源や連絡先のリストは、主に北米やイギリスが中心だが、無政府原始主義、反文明主義のグループは世界中に散在している。文明を破壊し、生命を再び野生に戻すために…。

Produced in July 2006 _

325mail c/o

ABC, Po Box 74,

Brighton, BN1 4ZQ, UK

325@hush.ai

www.325collective.com